

大学の図書館情報課程一九九〇—二〇〇〇

ケース…東洋大学図書館学専攻と東洋大学短期大学の周辺からみて

橋 本 典 尚

一 はじめに

二 調査と研究目的

二・一 先行研究と視点

二・二 対象資料・調査期間と方法

三・ライブラリアンスクール系譜

三・一 戦後の図書館学設置と背景

三・二 東洋大学図書館学専攻と東洋大学短期大学の司書課程

三・三 東洋大学社会学部図書館学専攻の改組

四 東洋大学図書館学専攻と東洋大学短期大学司書課程のカリキュラム編成

四・一 一九九〇年代の司書課程カリキュラム編成（図書館法施行規則の改正と変遷）

四・二 司書養成課程のカリキュラム

四・三 東洋大学短期大学の司書課程カリキュラム

四・四 一九九〇年～一九九五年と一九九六年～一九九九年の図書館学専攻カリキュラム編成の位置

四・五 一九九〇年～一九九九年の大学と学会「白山情報図書館学会」の位置

五 むすびに

資料

謝辞

注記

参考文献

一 はじめに

急速な情報化社会に変化した一九九〇年代、高等学校・短期大学・大学・大学院に進学したものととって、新旧の間にあった専門領域の改組再編は、強く記憶に残っている。だが、専門領域として学んだ軌跡から、消えた記録として、様子を伺えるものは少ない。高等教育の軌跡を見る上でも、関係する側からの行われた教育活動を、早い時期に調査再考する必要性は、大きいと言える。

一般に、専門教育を行う領域の範囲において、高等教育におけるカリキュラム編成と改定は、難しいとされる。特に、急速に変化する社会状況では、求められる要望と責務、学内での課題、進行学年との経過措置など、課題が多い。だが、その中であつて状況をみることは、教育視点を伺える貴重な資料と言える。

一九九〇年代、社会環境の変化に影響されたそのひとつに、図書館学科がある。それは、図書館学の領域が、旧来の手作業による技術から、情報機器を利用した情報技術の発展と共に、範囲を広げつつ変化、現在の（複合領域）図書館情報学につながっていると見える。また、学部学科の改組が進んだ一九九〇～二〇〇〇年代、国家資格「司書」の専門養成でありながら、図書館学科は、多角的に改組したケースであつたと言える。

かつて、図書館学の東洋大学（図書館学専攻）と言われたケースも、そのひとつと言える。東洋大学系司書の特徴として、資料の整理技術と地域と連携した社会活動などの専門視点が大きかったと評価される。だが、一九九〇年代、多くの大学が改組したのと同様に、東洋大学も二〇〇〇年四月、社会学部の学科改組を行い転換している。

現在でも、国家資格「司書」資格の取得は、文部科学省委属の司書講習を基礎としている。そのため、「相当科

目」の意味合いから司書課程の設置認定を行つてゐる。二〇一〇年三月現在、司書講習相当科目の単位認定大学一覧²⁾から司書課程を設置している大学は、237ある。短期大学81（公立3私立78）、四年制大学156（国立10公立5私立141）である。だが、専任司書職の公募はバブル経済の崩壊後、ほとんどない。なぜ、社会的責務ある大学の専門教育養成が、専門職に結びつかないのだろう。国家資格でありながら看護師などと異なり、専門職としての位置が未確立である司書の背景には、何が存在するのであろうか。

本論の目的は、司書養成から見ていた一視点をみることにある。その例として、東洋大学図書館学専攻と東洋大学短期大学司書課程を中心に独自性とカリキュラム編成点が、どこにあつたのかを報告する。

二 調査と研究目的

二・一 先行研究と視点

学科の歴史、カリキュラム変遷については、大学史などでも知ることは出来る。だが、近年において、消えた側の歴史については、あまり記録されることは少ない。だが、東洋大学社会学部図書館学専攻の場合、詳細でないが、少しだけ記録が伺える。主な先行研究に、岩淵泰郎（二〇〇二）『応用社会学科図書館学専攻の歴史』、『白山図書館学研究』³⁾、岩淵泰郎（一九九〇）『東洋大学図書館学専攻の新カリキュラムと今後の課題』、『白山情報図書館学誌』⁴⁾、和田吉人（一九七五）『東洋大学司書司書補講習の概要』、『東洋大学図書館学講座史』⁵⁾などが挙げられる。また、東洋大学・東洋大学短期大学の司書課程については、詳細でないが、橋本典尚（二〇〇二）『東洋大学短期大学と図書館学教育』、『白山図書館学研究』などでも様子を伺える。

なお、東洋大学社会学部では、二〇〇九年から『東洋大学社会学部50年史』^⑥刊行とWeb化をすすめている。

また、制度の全体論として、司書課程のカリキュラム編成については、長年、色々な機関で論議されてきたと言える。文部省（一九六七）『司書講習等の改善に関するについて報告』^⑦は、制度カリキュラム論について行われていた代表と言える。新技術導入について賛否と共に、「施行規則」改正が大きかった一九九〇年代は、パソコンなど情報機器の一般化と共に、旧来からの手書きによる司書技術の方法論が薄くなり、情報機器を利用した司書技術の方法論視点が、技術利用から変化した時期と言える。ゆえに、一九九六年の改正時にも様々な論議が行われ、主なものに、根本彰（一九九七）「40年の空隙を埋める」、『日本図書館協会会報』^⑧81、日本図書館情報学会研究委員会（一九九八）『図書館学研究とその支援体制』研究報告などが挙げられる。

そこで本論では、一九九〇年代を中心に、改組する少し前の東洋大学図書館学専攻カリキュラム編成の軌跡から、東洋大学・東洋大学短期大学の司書教育と専門領域の視点について見ると共に、資料をまとめることを目的とする。

二・二 対象資料・調査期間と方法

一九九〇年代、情報化社会の発展と共に、情報機器を利用した技術からの司書課程への影響は、大きかった。そこで、二〇〇四年一月から二〇一〇年二月の期間で確認できた資料で、一九九〇年代を中心に「東洋大学・東洋大学短期大学・学校案内（一九九四、一九九七、一九九九）」、「東洋大学社会学部履修要覧（一九九四、一九九七）」、「東洋大学短期大学ハンドブック（一九九二、一九九四、一九九七、二〇〇〇）」、関連する資料「白山情報図書館学会論集（一九七八～一九九九）」、「白山情報図書館学会誌（一九八八～一九九九）」を対象として、東洋大学図書館学専攻と東洋大学短期大学司書課程カリキュラムから概要の考察を試みた。現在、橋本典尚（二〇一〇）が所有する

東洋大学・東洋大学短期大学・白山情報図書館学会など（出身校）の資料を中心に、収集整理から考察を行った。

三 ライブラリアンスクール系譜

三・一 戦後の図書館学設置と背景

日本国内におけるライブラリアンスクール系譜、司書養成機関として、国で行われていた文部省図書館職員養成所が挙げられる。当時、学費無料であったことから、その役割が大きかったことを語っている。前身は、戦前の文部省図書館員教習所、帝国図書館員教習所であり、後に、国立の図書館短期大学が設置され、図書館情報大学^⑩となって現在は、筑波大学の図書館情報学類（図書館情報専門学群）になっている。

なお、武田元次郎^⑪（一九九七）によると、戦前の一時期、厳密な国家資格化にしようと司書職専門検定試験が行われたが、不安定な状況から終了したと言う。

今日、図書館学・司書講習と言えば、鶴見大学、筑波大学などが挙げられる。また、日本国内において敗戦後、占領期に○田教育改革の影響から、慶應義塾大学のように、アメリカからの支援で図書館学を設置した流れもある。また、戦前には同志社大学^⑫のように図書館学研究会を主体に独自の講習会を行っていたケースもある。その後、一九九〇年代に、愛知淑徳大学図書館情報学科の新設なども伺えるが、二〇〇〇年代の近年では、鶴見大学ドキュメンテーション学科のように、図書館情報学から専門領域を広げて学科の新設が行われているケースが伺える。なお、国立大学でも、東京大学・京都大学で図書館学課程を、占領期にアメリカからの支援で設置した経緯がある。だが、東洋大学社会学部応用社会学科図書館学専攻の場合、設置した背景は異なり、当時の文部省図書館職員養成

所からサポートはあったものの、私学で独自の設置を行った経緯がある。設立された図書館学科の中では、異色であつたと言える。

三・二 東洋大学図書館学専攻と東洋大学短期大学の司書課程

一般に、東洋大学図書館学専攻の特色について、問われることがある。他大学のように文学部・教育学部ではなく、社会学部応用社会学科に設置された理由は何であろうか。一九五九年社会学部の設立時の構想を推進した米林富男（一九五九）らの案と共に、専攻科教員として中心にいた和田吉人（一九五九）による「図書館も一つの社会的な運動であると理解し、図書館学の基礎は社会学でなければならぬ」との認識が強かった理由が大きいようである。そのことは、後に、専攻科教員として石井敦（一九九四）の演習ゼミを利用して、全国各地で行った地域の公共図書館調査でも証明されている。特に、いくつかの地域では、公共図書館の設立準備に計画案から関わり、活用されたことは、各地で、図書館設立運動の盛んであつた時期に、実地で活用されたケースとして興味深い。だが、それだけでなく、目録分類資料整理などの司書技術も、専攻科教員であつた岩淵泰郎（一九九四）によつて、詳細に行われていたことでは、知られている。共に、一九八〇～一九九〇年代、「理論の石井、技術の岩淵」と言われていたことでも知られている。なお、専攻の様子については、松島道也（一九九五）談話などからも伺える。以上の点から全般的に、図書館学を社会学部に設置した点については、現在の時事に対応出来るように願つた特色であつたと言える。そのことは、白山社会学会フォーラム（二〇〇三）で「社会学部の理念を、扇のカナメ」として「図書館情報学を中心に」持つていたことが奥田道大（二〇〇三）ほか社会学部案を構想した米林富男（一九五九）との談話記憶からの話しても伺える。

三・三 東洋大学社会学部図書館学専攻の改組

二〇〇九年、東洋大学社会学部は50周年を迎えた。その歴史の中で、かつて、図書館学の東洋大学と言われた時期がある。特に、公共図書館の新設が多かった一九六〇～一九九〇年代である。一九五〇年にはじまった東洋大学の司書講習（一九五五年から文部省委属司書講習一九七四年まで）は、後に一九五九年の社会学部の設置と共に、社会学部応用社会学科図書館学専攻を開設した経緯がある。東洋大学では、社会学部図書館学講座で最大、司書課程が五つ（社会学部応用社会学科図書館学専攻・社会学部司書課程・司書講習・司書補講習・東洋大学通信教育部司書課程・東洋大学短期大学司書課程）設置をしていた。当時、東洋大学では、社会学部を通じて情報科学を中心に置いていた「図書館学教育」を行う理念を持っていた。だが、パソコンなど、情報技術の発展と共に、図書館としての専門的な技術の意味合いも一般化、次第に求心力を失って行つたと言える。他大学が改組して行くのと同様に、東洋大学も二〇〇〇年、社会学部を五学科（社会学科、社会文化システム学科、社会福祉学科、メディアコミュニケーション学科、社会心理学科）に改組を行い、図書館学専攻も、司書教育からの方針を転換、現在は、図書館情報学の専門性と応用幅を広げている。

なお、現在、新しく設置されている東洋大学文学部日本文学文化学科司書課程は別で継承はしていない。

四 東洋大学図書館学専攻と東洋大学短期大学司書課程のカリキュラム編成

四・一 一九九〇年代の司書課程カリキュラム編成（図書館法施行規則の改正と変遷）

図書館法施行規則が二〇〇九年四月三〇日改正省令施行された。今改正では、全体を20単位から24単位に改正、

再度、目録と分類を分けたり、「生涯学習概論」を1単位から2単位に拡充したり、情報化社会に必要な「図書館情報技術論」の新設など、科目単位数を変化させている。だが、一九九〇年代、最も多かった科目単位数までには、戻っていない。近年でも、度々行われていたが一九九〇年代の改正ほど、大きなものはなかったと言える。特に一九九六年、情報化する直前の社会変化にあわせて大幅な改正があった記憶は新しく、一九六八年以来の改正であつただけに、影響は大きかったと言える。当時の「文部省令第27号、平成八年（一九九六年）八月二十八日付で改正告示」でみると、新設科目として、「図書館経営・レファレンスサービス・情報検索サービス・児童サービスの基礎」が伺える。また、図書館利用と活用から、経営と共に、「生涯学習論」の視点が加わったことも、特色として挙げられる。だが、一方で、情報機器を利用した技術応用と共に、従来からの手書きによる司書技術の科目幅は、単位数と共に減少している。一九九〇年代は、司書課程の内容数も多く、新旧の司書技術が共存していた時期であつたとも言える。それゆえに、一九九〇年はじめに、情報機器を利用した「情報管理」の新設科目から変化しはじめた内容に、当然、学科昇格をめざしていた図書館学専攻の図書館学カリキュラム編成にも影響が大きかったことは、否めないだろう。

そこで、東洋大学短期大学ハンドブック¹⁸（一九九四・一九九七・二〇〇〇）司書課程のカリキュラムを参照に、カリキュラム変遷を、一九九六年改正（一九九七年と一九九八年からの改正された新カリキュラム）と共に、前後の一九九四年～一九九七年～一九九八年の設置科目と法令科目から、司書課程カリキュラム変遷を表にしてみていることにする。

一九九四年（旧設置科目）↓一九九七年（科目）↓（一九九六年・新法令科目）↓一九九八年（新設置科目）・単位数

情報図書館学Ⅰ↓図書館学概論↓(図書館学概論)↓情報図書館学1・2単位
 情報図書館学Ⅰ↓図書館資料論↓(図書館資料論)↓情報図書館学2・2単位
 情報図書館学Ⅱ↓参考業務・参考業務演習Ⅰ↓(情報サービス概論)↓情報図書館学3Ⅰ・2単位
 情報図書館学Ⅱ↓参考業務・参考業務演習Ⅱ↓(レファレンスサービス演習)↓情報図書館学3Ⅱ・2単位
 情報図書館学Ⅲ↓資料目録法・資料目録演習Ⅰ↓(資料組織概説)↓情報図書館学4Ⅰ・2単位
 情報図書館学Ⅲ↓資料目録法・資料目録演習Ⅱ↓(資料組織概説)↓情報図書館学4Ⅱ・2単位
 情報図書館学Ⅳ↓資料分類法・資料分類演習Ⅰ↓(資料組織演習)↓情報図書館学5Ⅰ・2単位
 情報図書館学Ⅳ↓資料分類法・資料分類演習Ⅱ↓(資料組織演習)↓情報図書館学5Ⅱ・2単位
 情報図書館学Ⅴ↓図書館活動論↓(図書館サービス論)↓情報図書館学6・2単位
 情報図書館学Ⅵ↓情報管理・情報整理↓(情報検索演習)↓情報図書館学7・2単位
 情報図書館学Ⅵ↓社会教育↓(生涯学習論)↓情報図書館学8・2単位
 情報図書館学Ⅵ↓マスコミュニケーション↓(コミュニケーション論)↓情報図書館学8・2単位
 な し ↓新設科目↓(図書館経営論)(図書及び図書館史)↓情報図書館学9・2単位
 な し ↓新設科目↓(児童サービス論)↓情報図書館学10・2単位
 な し ↓新設科目↓(専門資料論)↓情報図書館学11・2単位
 情報図書館学Ⅴ↓学校図書館通論↓(学校図書館通論)↓情報図書館学12・2単位
 情報図書館学Ⅴ↓学校図書館の利用指導↓(学校図書館の利用指導)↓情報図書館学12・2単位

一九九〇年代、東洋大学短期大学では、司書課程科目を通年単位で設置していたが、東洋大学短期大学でのセメスター制度導入から、学科科目だけでなく資格科目も半期単位に統一した。なお、学部も同様の経過でいる。東洋大学短期大学司書課程の場合、図書館学専攻の専門カリキュラムを除いて、学部司書課程と同様に、司書課程の状況が伺える。一九九六年の改正によつて新設された科目「図書館経営論」と「図書及び図書館史」をあわせて↓「情報図書館学9」、「児童サービス論」↓「情報図書館学10」、「専門資料論」↓「情報図書館学11」を新設している。また、学校図書館関連の科目については、従来から「情報図書館学V」で「学校図書館通論」「学校図書館の利用指導」で開設していたことから「情報図書館学12」として設置している。

東洋大学短期大学司書課程・東洋大学司書課程の特徴として、新しい情報機器を利用した司書技術と共に、旧来からの司書技術の内容科目も残していたことが伺える。例えば、「参考業務・参考業務演習Ⅰ」↓「情報サービス概論」、「参考業務・参考業務演習Ⅱ」↓「レファレンスサービス演習」「資料目録法・資料目録演習Ⅰ」↓「資料組織概説」「資料目録法・資料目録演習Ⅱ」↓「資料組織概説」「資料分類法・資料分類演習Ⅰ」↓「資料組織演習」「資料分類法・資料分類演習Ⅱ」↓「資料組織演習」である。パソコンを利用した情報処理と平行して、和書洋書のカード目録などの演習と共に、ZDDだけでなく、DDCなど海外の分類、件名標目などについて重点を置き行われている点で特色が伺える。では、図書館学専攻カリキュラム編成においても、同様な傾向が伺えるのであろうか。次にかリキュラム変遷についても見て行く。

なお、一九九六年の改正が急であった様子などは、文部科学省委属司書講習で古参の鶴見大学『「夏会報46」「事務連絡」』からも伺え、参照までに科目の変化を表にして提示しておく。

新規一九九六年(単位)／旧規(単位)「司書講習の認定(読み替え)科目」

生涯学習論・1単位／社会教育・1単位

図書館概論・2単位／図書館通論・2単位

図書館経営論・1単位／科目なし

図書館サービス論・2単位／図書館活動論・2単位

情報サービス概論・2単位／参考業務・2単位

レファレンスサービス演習・1単位／参考業務演習・1単位

情報検索演習・1単位／情報管理・1単位、図書館資料論・2単位／図書館資料論・2単位

専門資料論・1単位／人文科学および社会科学の書誌解題・1単位 自然科学と技術の書誌解題・1単位

資料組織概説・2単位／資料目録法・1単位 資料分類法・1単位

資料組織演習・2単位／資料目録演習・1単位 資料分類演習・1単位

児童サービス論・1単位／青少年の読書と資料・1単位

図書および図書館史・1単位／図書および図書館史・1単位

資料特論・1単位／資料整理技術特論・1単位

コミュニケーション論・1単位／マスコミュニケーション・1単位

情報機器論・1単位／視聴覚教育・1単位

図書館特論・1単位／図書館の施設と設備・1単位 または、社会調査・1単位

鶴見大学図書館学講座(一九九六)「夏会報・事務連絡(改正省令告示)から参照(二〇一〇作成)」

科目名称変更と共に、内容の範囲が広がり、「情報資料の処理技術」、「コミュニケーションと運営」、「児童の教育活動」の視点が大きくなっていることがわかる。一九九〇年に情報機器を利用した「情報管理」科目が新設されて以降、生涯学習の一般化と共に、社会教育施設のひとつである「図書館」も変化の一端をたどってきた。だが、インターネットの一般化によって、「情報のある場所」が「図書館」「メディア」だけでなく、誰でも気軽に手に出来る時代になった時、図書館学専門「司書」の役割も変化していったと言える。

なお、一九九〇年代、生涯学習が社会教育施設に影響した代表として、図書館を前面に出さないようにした山形県立図書館の「遊楽館」などが挙げられ、大型施設の新設が多かった時期の代表として、藤沢市立総合図書館などが挙げられる。これらは、後々、教育施設に与えた影響が大きかったと言われている。では、東洋大学図書館学専攻の場合、社会状況の影響から、どのようなカリキュラム編成があつたのだろうか。

四・二 司書養成課程のカリキュラム

急速な受験生・学生の増加から、一九九〇年代は、どの学科でも、新設とカリキュラム編成が多かったと言える。先にも述べたが、「図書館法」での司書養成科目の改正も多かった時期であり、東洋大学社会学部図書館学専攻でも、大幅なカリキュラム改定の多さが伺える。主な流れを表にしてみると、次のようになる。専門領域の単位数からみると司書養成科目を基本にして一九五九年に、専門必修科目を28単位に上げ、その後、一九六二年に専門科目16単位、選択科目32単位、一九六四年に専門必修科目を38単位まで上げて、一九九〇年代までの形態を維持している。このことは、東洋大学では司書講習を一九七四年に終了した原因であり、理由について、専攻科の教授であつた岩淵泰郎（一九九七）によると、図書館学科として専門家を養成して38単位以上を履修しているのに、短期養成では20単

位の履修で「平行しているのは良くない」と疑問論議が起こり、学科昇格をめざす点からも司書講習を終了したと伺う。現場職員の受講が多かった「東洋大学司書講習・司書補講習・司書教諭講習」では、約八〇〇〇名が資格を取得、現在でも各地で活躍している。

初期の一九六〇年代、補充していく編成形態から、大幅に変化しているのが、実習科目を4年次から3年次に変更した一九八五年以降と言える。特に、司書養成科目の改正から「情報管理」科目の新設がある直前、一九八八年、一九九〇年、一九九六年と短期間に複数回行われ、急激な内容の変化も大きかった様子がわかる。その後、二回の大幅な改定となった一九九〇年と一九九六年では、専門領域の科目を新設と再編を行っている。そこで、一九九〇年の学科に昇格する準備として図書館学専門科目の充実化、「演習」の1～4年必修化した内容と、一九九六年に、卒業条件「司書資格取得の決まり」を外し情報技術を充実化したカリキュラム編成の内容から、情報化社会の始まった時期、どのような変化が起きたのか、専門領域の特色からみることにする。

主な東洋大学司書課程のカリキュラム編成と周辺の流れ

一九五〇年・東洋大学図書館学講習を開始、東洋大学短期大学の（新設）開校、

一九五二年・初の司書四名、17科目18単位、

一九五三年・司書補講習を始める、東洋大学図書館研究会の設立、

一九五五年・文部省委属司書講習を開始、一九五六年から夏期講習（一九七四年まで）、

一九五九年・東洋大学社会学部応用社会学科（広報学専攻・社会福祉学専攻・図書館学専攻）を新設、

一九六二年・東洋大学応用社会学科に学科専攻「マスコミ学・社会福祉学・図書館学・社会心理学」を設置、

一九五九～一九七〇年・少しずつ、科目新設と専門領域科目の必修単位を24↓28↓34↓36↓38に上げる、
 一九七三～一九七四年・一九七三年「ドキュメンテーション」の新設、一九七四年「文献解題」の新設、
 一九七四年・文部省委属東洋大学司書講習終了、一九七二年には司書補講習も終了、専門学科教育を中心にする、
 一九八五～一九八七年・4年次の実習を外し3年次に必修化、一九八七年・白山情報図書館学会の設立、
 一九八八～一九八九年・他学部にさがし高度情報化にあわせる科目・情報学の専門科目「情報管理」など新設、
 一九九〇～一九九五年・図書館学科に昇格する準備として図書館学専門科目の充実化、ゼミの1～4年必修化、
 一九九六～一九九九年・図書館学専攻の卒業条件「司書資格取得の決まり」を外し多様化する情報技術を充実化、
 二〇〇〇年・応用社会学科の改組により図書館学専攻マスコミ学専攻をメディアコミュニケーション学科に、
 二〇〇二年・東洋大学短期大学（観光学科、二〇〇一年に日本文学科、英文学科）を閉校、発展的に学部改組、
東洋大学社会学部図書館学専攻・東洋大学短期大学・司書課程カリキュラム編成と関連年表（二〇一〇作成）
 一九九〇年に必要単位が136単位のうち、90単位が学科の専門単位で、その中に専攻で38単位以上を必修としていた。だが、専門だけでなく教養科目などとの関係から、専門の範囲を狭めつつ履修できる領域の幅を広げていった傾向も伺える。学科だけで編成する思いだけでなく専門性の変化した背景も大きい。

四・三 東洋大学短期大学の司書課程カリキュラム

東洋大学の司書養成課程を考えるのに、基本として、東洋大学短期大学の司書課程カリキュラムがある。姉妹校でもある東洋大学短期大学の司書養成課程は、一九五〇年、短期大学を設置した当初から、東洋大学司書講習と共

に大学の図書館学講座で担当サポートしてきた経緯がある。短期大学の場合、東洋大学図書館学専攻の学部と異なり、内容も単位数も少なかった。科目名など全体のカリキュラム改編にあわせて、一九九〇年に図書館学専攻課程カリキュラムとの統一から「情報図書館学Ⅰ～Ⅵ」に変更した。だが、学部と別組織から互換性なく、学部編入時に認定単位されないことから、一九九六年に全てを4単位に改正、科目を拡充している。東洋大学で司書課程の基本科目となっていた区分は、一九九四年の東洋大学短期大学司書課程開設科目から、次のように伺える。

なお、東洋大学短期大学は、学部改組して二〇〇二年に閉校している。

設置科目・（法令科目）

情報図書館学Ⅰ（図書館通論・図書館資料論）	4単位（1年）
情報図書館学Ⅱ（参考奉仕・参考奉仕演習）	3単位（1年）
情報図書館学Ⅲ（資料目録法・資料目録法演習）	3単位（1年）
情報図書館学Ⅳ（資料分類法・資料分類法演習）	3単位（2年）
情報図書館学Ⅴ（図書館活動・学校図書館通論・学校図書館の利用指導）	4単位（2年）
情報図書館学Ⅵ（情報管理・資料整理論・社会教育・マスコミュニケーション）	4単位（2年）

東洋大学短期大学司書課程（一九九四）開設科目から参照（二〇一〇年作成）

司書の取得者数は、東洋大学短期大学3学科（日本文学学科・英文学科・観光学科：定員各二〇〇名）では毎年、三〇名前後の司書取得者がいた。東洋大学図書館学専攻で毎年、卒業生が五〇～七〇名（第1～40期卒業生が

二〇〇〇名）前後であるのに対して、人数的に多かったとは言えない。だが、司書職を求める資格志向の短期大学生にとつて、図書館学専攻を中心に行われていた司書教育の役割は、大きかったと言える。

四・四 一九九〇年～一九九五年と一九九六年～一九九九年の図書館学専攻カリキュラム編成の位置

専門領域カリキュラム編成の比較に際して、図書館学の柱から情報学の柱に移動していた一九九〇年代に行われた2回の専門領域科目の変化からみることにする。特に、専門領域群を中心として、カリキュラム編成の対照を行った。一九九六年～一九九九年と一九九〇年～一九九五年の図書館学専攻カリキュラム編成の科目については、既存で開講していた科目から改編移動した科目を↓矢印で表示し新設の場合はないものとした。

はじめに、全体から比較して注目すべき点は、専門領域の必修科目が大幅に減っていることである。特に、一九九六年の改定で、「卒業要件にあった司書資格取得」事項を外したことは、図書館学専攻として、大きく司書教育の機軸を外した変化であったと言える。そのため、必修の専門科目であった内容も、従来の司書技術であった科目を中心に選択科目に移動している。例えば、科目名で改定しているなかでも、1年必修「図書館資料組織論Ⅰ」の分類演習が1～2年選択「情報分析論および実習」になり、2年必修「図書館資料組織論Ⅱ」の分類演習が1～2年選択「情報組織論および実習」になって、本来の技術方法だけでない、パソコンなど情報機器を利用した内容に転換していることがわかる。ただ、「図書館情報学演習」調査・研究方法のほかに、一部、行われた内容であったことは、技術性からの教育科目の配置からも課題であったと言える。また、2年必修「レファレンス／情報サービス論」も1～2年選択「レファレンスサービスおよび実習」に移動、それまで、開講されていた1～4年選択「日本図書館史」「欧米図書館史」「出版・読者論」がなくなり、「図書館情報学概論」の中で扱いつつ一部、3～4

年選択「情報図書館特講Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ」で担当教員により異なるが、扱われる内容となったことも、図書館学の流れを主体としなくなっていたことがわかる。また、新設された3～4年選択「図書館経営論」などについて、慶應義塾大学、同志社大学で科目として初期の頃から設置されていた状況と異なり、設置が改正された後であったことは、現場での教育運営、施設運営について、注目していなかった傾向とも言える。司書スキルとしての技術面が大きかったことも一因であろう。だが、一九九〇年に、東洋大学図書館学専攻で「演習」科目の全学年必修化と新設科目の改定が行われた際、新設した専門科目の指定選択として、「情報検索、情報メディア、情報図書館学特講Ⅰ（学校図書館・児童サービス論）、情報図書館学特講Ⅱ（美術ドキュメンテーション）」などが何え、情報機器を利用した科目の設置と共に、児童教育活動などでは、方向性は早かった一面もある。岩淵泰郎（一九九〇）によれば、応用社会学科（マスコミ学専攻・社会心理学専攻・図書館学専攻）での各科目を共通に再編「情報環境論、情報行動論、情報管理論」（図書館学専攻は「情報管理」が指定選択科目）として、専門領域化したと述べている。

一九九〇年～一九九五年・専門領域科目群	↓	一九九六年～一九九九年・専門専門領域群	
1年必修・情報図書館学概論	…… 4単位	↓1年必修・図書館情報学概論	…… 4単位
1年必修・情報図書館学演習Ⅰ	…… 2単位	↓1年必修・図書館情報学演習Ⅰ	…… 4単位
1年必修・図書館資料組織論Ⅰ	…… 4単位	↓1～2年選択・情報分析論および実習	…… 4単位
2年必修・図書館資料組織論Ⅱ	…… 4単位	↓1～2年選択・情報組織論および実習	…… 4単位
2年必修・図書館サービス論	…… 4単位		
2年必修・レファレンス／情報サービス論	4単位		

3年必修・情報図書館学演習Ⅱ……………2単位
↓2年必修・図書館情報学演習Ⅱ……………4単位

3年必修・図書館資料論……………4単位

3年必修・図書館資料論演習……………2単位

4年必修・情報図書館学演習Ⅲ……………4単位

↓3年必修・図書館情報学演習Ⅲ……………4単位
↓4年必修・図書館情報学演習Ⅳ……………4単位

3↘4年必修・情報図書館学実習Ⅰ・2単位

3↘4年必修・情報図書館学実習Ⅱ・2単位

※必修科目38単位

※必修科目20単位

1↘4年選択・情報メディア論……………4単位

↓1↘2年選択・情報メディア論……………4単位

↓1↘2年選択・情報サービス論……………4単位

2年必修科目から1↘2年次選択科目に移動

↓1↘2年選択・レファレンスサービスおよび実習・4単位

1↘4年選択・日本図書館史……………4単位

1↘4年選択・欧米図書館史……………4単位

1↘4年選択・出版・読者論……………4単位

1↘4年選択・情報検索論……………4単位

1↘4年選択・情報検索実習……………2単位

↓3↘4年選択・情報検索論および実習……………4単位

1↘4年選択・情報活用論および実習・4単位↓3↘4年選択・情報活用論および実習……………4単位

1↘4年選択・情報処理基礎実習……………2単位

1 1 4年選択・情報図書館システム論・4単位 ↓ 3 1 4年選択・情報システム論 …… 4単位

1 1 4年選択・情報図書館特講Ⅰ・4単位 ↓ 3 1 4年選択・情報図書館特講Ⅰ …… 2単位

1 1 4年選択・情報図書館特講Ⅱ・4単位 ↓ 3 1 4年選択・情報図書館特講Ⅱ …… 2単位

↓ 3 1 4年選択・情報図書館特講Ⅲ …… 2単位

↓ 3 1 4年選択・情報図書館特講Ⅳ …… 2単位

↓ 3 1 4年選択・図書館経営論 …… 2単位

※選択科目内で6科目以上を選択する条件

※選択科目内で各16単位以上を修得条件

4年選択・卒業論文・8単位 ↓ 4年選択・卒業論文・8単位

※専門領域群で36単位 ※専門領域群で36単位

学部共通領域群

1年必修・社会学概論 …… 4単位 ↓ 1年必修・社会学概論 …… 4単位

2年必修・社会調査 …… 4単位 ↓ 2年必修・社会調査方法論 …… 4単位

3年必修・社会調査および実習 …… 4単位 ↓ 3年必修・社会調査および実習 …… 4単位

※共通科目選択必修8単位 ※共通科目選択必修12単位

1 1 2年指定選択・情報管理論 …… 4単位 ↓ 1 1 2年指定選択・情報管理論 …… 4単位

1 1 2年選択・情報環境論・4単位

1 1 2年選択・情報行動論・4単位

1 1 4年選択・社会心理学概論 …… 4単位 ↓ 1 1 2年選択・社会心理学概論 …… 4単位

1) 4年選択・マスコミュニケーション・4単位 ↓ 1) 2年選択・マス・コミュニケーション概論・4単位

↓ 1年選択・情報処理基礎実習 …… 2単位

学部共通選択科目にあったものを必修選択に ↓ 2年選択・情報処理応用実習 …… 2単位

※選択必修科目3科目以上

※選択必修科目で8単位以上

図書館学専攻専門領域群 一九九〇～一九九五年 ↓ 一九九六～一九九九年のカリキュラム変遷 (二〇一〇作成)

なお、名称が「情報図書館学」から「図書館情報学」に改定した背景について、「日本図書館学会」が一九九八年に「図書館情報学会」に変更して図書館情報学の基軸にした影響と言える。ただ、東洋大学図書館学専攻の場合、図書館学の技術を基礎に情報学を広げていた姿は、最後まで変えなかった特色と言える。

東洋大学図書館学専攻には、平均して1学年五〇名前後、多い時で七〇名前後が在籍していた。その中で、図書館学で「卒業論文」を選択したのは、2/3程度であった。東洋大学社会学部紀要(一九九三)卒業論文から図書館学専攻三二名が確認出来る。就職率で言うところ、図書館学専攻就職情報連絡会(一九九九)の卒業生との確認で就職に着けたのは一九八〇～一九九九年までで約二三〇名としている。就職難の時代に、専門職に着けた率で高かったと言える。だが、司書職を希望した全員が手に出来たわけではないことは、難しい状況と言える。

本論では、東洋大学社会学部図書館学専攻を中心にカリキュラム編成からみていた視点を考察してきた。結果、社会が変化する中で、旧来の司書スキルと新しいスキルとが急速に変化する様子が伺えたと言える。特に、複合化する新領域に対して、枠から越える悩みを持つていた視点は、現在に続く課題と感じる。

東洋大学図書館学専攻の場合、従来からの司書技術スキルとしての能力を、パソコンなどの情報機器の技術利用

と応用と、図書館学の整理技術の利用と応用と共に構築しようとしていた傾向が、カリキュラム編成から伺える。だが、それは、図書館職経験出身側の教員と、新しい情報技術研究経験出身側の教員との意識の差も大きかったように感じる。近年、主となる専門領域からの教育課程がないと指摘される図書館学教育だが、高山正也²⁾(一九九九)は、図書館学教育の現状についての課題を「図書館情報学の研究内容」と「図書館情報学の大学での扱われ方」を挙げている。特に、一九八〇年代のアメリカで図書館学科の改組が起きたと同様に、日本国内においても「職業的ハツ・ツ」に度が過ぎて、本来の社会学的な研究方法と情報技術的な研究との総合化が機能しなくなっていた状況について触れている。それは、日常生活に図書館が深く入り込んでいない日本にとって、現在の情報化社会は、インターネットの普及と共に、情報収集のスキルを一般化させ、司書職の専門性を薄くした時期であつたのではないかと感じている。また、一九九六年の先の改正により、情報機器の技術利用と共に、図書館経営の新しい理論が司書課程に入ってきたことによつて、司書としての考え方にも大きな変化が生まれたのも事実である。効率化の求めと共に、図書館司書職としての機能が失われ、専門職採用でなく、ボランティア・派遣・嘱託が進んだとも言われている。

二〇一〇年現在、大学など高等教育機関における授業形態の変化は、教育環境と共に急速に早まっている。従来型の講義形式から、ひとりひとりととの双方向形式などに変わりつつある状況は、教育支援、図書館などの施設、大学環境からも、多様に求められていると言える。教育支援の施設としても変化しつつある現在、果たして「私にとつて、魅力ある図書館は」あるのだろうか。いま一度、「複合領域から情報をみる」視点と共に、図書館学の理念「動く有機体」について再考し多様化する時期にきているとも思うのである。

四・五 一九九〇年～一九九九年の大学と学会「白山情報図書館学会」の位置

各大学では、専門領域の研究活動の場として、学内学会、学外学会として設立し活動している。例えば、慶応義塾大学の「三田図書館・情報学会」、愛知淑徳大学の「愛知淑徳大学図書館情報学会」、東洋大学の「白山情報図書館学会」などである。東洋大学系、「白山情報図書館学会」の特徴として、研究者より現場からの関わりが強かったことは、日本図書館情報学会研究委員会（一九九八）「図書館情報学研究とその支援体制」でも、「現場よりの研究」と指摘されている。慶応義塾大学系の「三田図書館・情報学会」が、大学教員・大学院生などを中心に、全国規模になったのに対して、東洋大学系の「白山情報図書館学会」が小規模のままで活動した点は、研究者を育てるより、現場から声を出す性格が大きかったからと言える。

「白山情報図書館学会」は一九八七年に設立された。前身は、東洋大学図書館学専攻卒業生の集まりであった「図書館学専攻の会」である。一九八四年「東洋大学社会学部図書館学専攻同窓会」に改編した頃から、現場に出た卒業生から研究の場を求める声が大きくなり「白山情報図書館学会」が設立した背景がある。当初は、学内的な学会「東洋大学図書館学会」をめざしていたが結果的に、図書館学専攻の卒業生と教職員を中心とした学会となっている。そのため、カリキュラム再編など、時事トピックスについて、学会から伺える資料も多く、貴重と言える。ここでは、一九九〇年代を中心に、白山情報図書館学会の資料を、資料リストとして、別記にまとめ提示しておく。

五 むすびに

一般に、図書館学と司書のイメージとして、「ひとり・まじめ・しずか」などが挙げられる。藤野幸雄（一九九八）

は「図書館員とはいかなる人種か」⁽²⁾で、ヨーロッパ（イギリス）で知られる「図書館長の幽霊伝説」を紹介、「生前、やり残した仕事を休館日に現れて仕事を続けている」話しから、「図書館員の責任感が強い」傾向を述べている。本来、図書館の機能・司書の役割には、利用者のためにあり、一 情報の収集、二 情報の整理、三 情報の保存、四 情報の利用、がある。だが、戦後の日本国で求められた「図書館学（司書）」の出発点は、それだけでなかったと言える。戦前、戦時中の情報統制から、一般市民が情報を気軽に入手、出来なかった反省点が大きかったと言える。特に、民主主義において、市民の意志により判断を行う際、基礎となる「情報から判断」には、図書館学が必要とされた理由がある。個人で良いと思う「正しい判断」を行うためには、ひとりひとり、気軽に多くの情報を入手でき、整理加工判断できるための軸として、図書館学・司書の価値が大きかったことは、忘れてはならないだろう。

インターネットとパソコン技術が発展した現在、二〇〇〇年に改組した東洋大学図書館専攻（メディアコミュニケーション学科）のように、図書館学の司書教育から転換し幅を広げたことに、その意味では、情報技術の応用をメディアと共に、コミュニケーション方法から教育して行く上で、「個人の情報収集処理と応用力から状況判断」を育成する方向性では、同じであったと言える。ただ、基礎であった図書館学専攻の旗を降ろして、司書教育から転換したことは、残念に感じる。それは、「白山情報図書館学会」設立時の理念に、「東洋大学の場合、社会学部に図書館教育が行われていることから、実証的研究や社会情報的研究も大いに行われることを期待したい」とあった視点が、現在、一般的に忘れてるように思うからである。

先年、橋本典尚（二〇〇二）「ネサヨ運動」⁽³⁾とその周辺」でも報告したが、一九六〇年代に全国展開した「ネサヨ運動」でさえ、図書館に教育活動の資料が残存しない現状は、広い視点で2次資料の構築を行なってなかった図書館の専門視点がかけていた結果と感じる。インターネットなど情報化しつつあった状況で、東洋大学らしい独自

の「図書館学カリキュラム」は、どこにみていたのだろう。それは、一九九〇年代前期には、司書技術に情報技術を加えた方向性であったと言える。だが、一九九〇年代後期に、急激なパソコンなど情報機器の一般化は、図書館職の技術スキルも変化をさせ、図書館学に求めた応用性を変化させたと言える。また、情報効率化などの視点で専門性を色あせたことも専門領域の全て、今後とも課題になるだろう。

本論では、カリキュラム編成の内容を中心にしたため、担当により方向性と内容に差がでる「演習」「特講」について考察を行わなかった。今後、「学会・ゼミ論集・講義」などからも調査を行い、カリキュラム編成の特色を専門高等教育の再考記録として、これからの幅広い教育の方向性に活用できたらと考えている。

資料

東洋大学図書館学専攻に關係する白山情報図書館学会は一九八七年に設立された。前身は、東洋大学社会学部図書館学専攻卒業生の集まりであった図書館学専攻の会である。後の、白山図書館学研究会は、同窓会的活動として行われていたが、一九八四年「東洋大学社会学部図書館学専攻同窓会」に改編し、その頃から、現場に出た卒業生から研究の場が欲しい求めから、白山情報図書館学会が設立した背景がある。当初は、学内的な学会「東洋大学図書館学会」をめざしていたが結果的に、図書館学専攻の卒業生と關係する教職員を中心とした学会として活動を行っていた。また、発表者には、学部生・大学院生・大学教員も同え、立場は多様であった。そのため、図書館学専攻の変化する様子、カリキュラム再編など、時事トピックスについて、学会から何える資料も多く、貴重な資料と言える。ここでは、一九九〇年代を中心に、白山情報図書館学会の資料リストをまとめ、提示しておく。

※白山情報図書館学会誌（1～11）リスト

第1号・白山情報図書館学会誌一九八八年八月／相田吉人（一九八八）創刊のことば／井出翁（一九八八）環境変化への挑戦／芳賀右

幾（一九八八）図書館建築／森茂樹（一九八八）県立図書館振興のための一施策／田沼澄子（一九八八）埼玉県の子ども図書館がかかわる問題／鬼頭宗範（一九八八）「わたしの図書館を手に入れるには」

第2号・白山情報図書館学会誌一九九〇年三月／岩淵泰郎（一九九〇）東洋大学図書館専攻の新カリキュラムと今後の課題／藤田節子（一九九〇）文獻データベースの設計技法／関根一弘（一九九〇）子どもの民族学（文化人類学）の問題点／小山俊子（一九九〇）千葉県市町立図書館の現状／竹内玲子（一九九〇）新潟県における学校司書の歩み

第3号・白山情報図書館学会誌一九九〇年二月／宮内美智子（一九九〇）大学・短大における図書館利用教育／石塚弘文（一九九〇）島根県における県立図書館の役割（私論）／高土正巳（一九九〇）首都圏の公共交通機関に関する情報サービスについて／前田美由貴（一九九〇）神奈川県立学校図書館研究会の活動について

第4号・白山情報図書館学会誌一九九二年一月／田村靖広（一九九二）専門図書館における雑誌記事索引の作成について／武林輝暁（一九九二）玉川大学図書館システムの設計思想と実践記録／金子義一（一九九二）データベースを用いた資料管理システムの構築／中川恭一（一九九二）田中邦造述「公共図書館の使命」研究ノート／小堺俊幸（一九九二）埼玉らいぶらりがいどをつくって

第5号・白山情報図書館学会誌一九九三年五月／謝灼華、呉炳忠（一九九三）中国文化発展と図書館／瀬田尚（一九九三）大学図書館における視聴覚サービスの現状について／村松正機（一九九三）最近の学校図書館の状況／小山郁子（一九九三）〈研究ノート〉「学校図書館開館資料」を読む

第6号・白山情報図書館学会誌一九九三年一月／岩淵泰郎（一九九三）子どもの新訂第9版「300社会科学」改訂についての考察／和氣たか子（一九九三）我が国の病院図書館の現状について／水澤弘幸（一九九三）県立図書館のあり方／日野知子（一九九三）東洋大学図書館朝霞分館の新しいところみ／小林直子（一九九三）イトーヨーカ堂の図書館経営（前編）／岩淵泰郎（一九九三）追悼・天野敬太郎先生

第7号・白山情報図書館学会誌一九九四年一月／石井敦（一九九四）図書館人・坂本四方太論／犬塚力生（一九九四）浜松市立図書館における外国人サービスの現状について／岡谷大（一九九四）図書館・情報学分野の学位に対する意識調査／小林直子（一九九四）

イトーヨーカ堂図書館経営（後編）

第8・9号・白山情報図書館学会誌一九九七年八月／野嶋尚子（一九九七）新館準備の資料選定／森茂樹（一九九七）既存図書のパール・ドラベル貼付およびデータ入力に関する実践的報告／村田基宏（一九九七）天野敬太郎先生研究のすすめ（提案）／佐倉由美子（一九九七）鳥瞰・我が国婦人図書館員論の軌跡（一）

第10号・白山情報図書館学会誌一九九八年六月／池谷のぞみ（一九九八）「電子図書館対従来の図書館」の図式を越えて／村松正樹（一九九八）学校図書館改正をどうみるか／明石浩（一九九八）図書館員は遊び感覚を大切に／佐倉由美子（一九九八）鳥瞰・我が国婦人図書館員論の軌跡（二）／石井敦（一九九八）戦中・戦後・東大法学部図書室武田虎之助先生の「日録」

第11号・白山情報図書館学会誌一九九九年一〇月／升井卓彌（一九九九）県立山口図書館第4代館長鈴木賢祐氏の業績／渡辺文仁（一九九九）図書館学専攻課程創設のころ／守谷六百年（一九九九）鈴木賢祐先生著作目録／高橋紀久子（一九九九）教科書図書館「東書文庫」の蔵書と運営の現状

※白山情報図書館学会（研究大会）論集（1〜12）リスト

第1回・白山情報図書館学会一九八七年二月／東京三多摩学会（一九八七）公共図書館における逐次刊行物の位置づけの変遷について／芳賀石機（一九八七）図書館建築と建築計画書／高橋隆一郎（一九八七）図書館および図書館職員に対する認識／中川恭一（一九八七）データに見る三多摩の図書館の図書館の二〇年

第2回・白山情報図書館学会一九八八年二月／久山啓子（一九八八）中国における図書館教育／下妻弘明（一九八八）埼玉の図書館／岡谷大（一九八八）人文社会学全文テキスト・データベースの考察／藤田節子（一九八八）データベースの構築について／石井敦（一九八八）帝国図書館におけるストライキ

第3回・白山情報図書館学会一九八九年二月／高土正巳（一九八九）首都圏の交通情報サービスについて／岡谷大（一九八九）情報図書館学と現象学／平川祐子（一九八九）千葉県の公共図書館アラカルト／関根一弘（一九八九）乙巳の民族学（文化人類学）の問題点／常盤繁（一九八九）読書と図書館利用に関する調査

第4回・白山情報図書館学会一九九〇年一月／井出翁（一九九〇）断層―北見地区図書館情報システム調査によせて／岡谷大（一九九〇）情報・図書館学における数理・理論的方法／関口正文（一九九〇）大学図書館の機械化について／常盤繁（一九九〇）図書館職員の専門職制に関する意識調査

第5回・白山情報図書館学会一九九一年一月／加藤晃一（一九九二）蔵書印からみた自館史／田沼澄子（一九九二）高等学校図書館における利用指導の現状と問題点／宮内美智子（一九九二）中国図書館事情

第6回・白山情報図書館学会一九九二年一月／坂元亨（一九九二）開宮不二雄の遺産／守谷勝人（一九九二）新図書館開館後三年間の問題点／鳥羽隆幸（一九九二）都道府県立図書館の協力レファレンスについて

第7回・白山情報図書館学会一九九三年一月／藤田節子（一九九三）デジタル技術が著作権に及ぼす影響／岡谷大（一九九三）図書館情報学分野の Doctoral Dissertations の一研究／石井敦（一九九三）中小レポートから三〇年

第8回・白山情報図書館学会一九九四年一月／岡谷大（一九九四）認知科学と情報図書館学／宮内美智子（一九九四）学校図書館と専門職養成／岩淵泰郎（一九九四）日本十進分類法・新訂9版

第9回・白山情報図書館学会一九九五年一月／高橋隆一郎（一九九五）図書館での電子計算機システム運用中の事故に関する一考察／藤田節子（一九九五）デジタル・ネットワーク環境をむかえた図書館と著作権問題

第10回・白山情報図書館学会一九九七年一月／金子義一（一九九七）PDAサーバー及びPDAの連携による安価でできるイントラネット構築／岡谷大（一九九七）図書館・情報・創造性／石井敦（一九九七）現代をどうみるか（当日は、岩淵泰郎（図書館学専攻主任教授）が代行発表を行い、応用社会科学と図書館学専攻の状況と共に報告）

第11回・白山情報図書館学会一九九八年一月／橋本典尚（一九九八）公立学校・図書委員会における冊子媒体の内容についての現状報告／岡谷大（一九九八）危機における図書館への組織科学的アプローチ／高橋隆一郎（一九九八）EIAアムステルダム大会に出席して

第12回・白山情報図書館学会一九九九年一月／宮内美智子（一九九九）私立短期大学図書館規定と利用案内・手引き類／岡谷大（一九九九）Hybrid Libraries の研究／橋本典尚（一九九九）「ことば」にみる「図書館学」とは何か？

一九八七～一九九九年までの「白山情報図書館学会」リスト資料

謝辞・本稿にあたって資料調査等に、ご協力頂きました、飯島みゆき・石井純子・岩淵泰郎（二〇〇四年逝去）・小山郁子（一九九九年逝去）・福島わかば・堀込静香（二〇〇三年逝去）・山内裕子ほか、関係者みなさまに、報告と感謝を申しあげます。（敬称省略）

注

- (1) 高等教育の軌跡については、近年、全国各地で、資料の収集、保存、整理、公開が始まっている。
- (2) 文部科学省（二〇一〇）司書講習相当科目の単位認定大学一覧・http://www.next.go.jp/a_menu/shougai/gakugei/shisyo/（2009—）
- (3) 岩淵泰郎（二〇〇二）『応用社会学科図書館学専攻の歴史』『白山図書館学研究』緑蔭書房 pp.115-132
- (4) 図書館学専攻での情報化にあわせたカリキュラム編成の視点については、岩淵泰郎（一九九〇）『東洋大学図書館学専攻の新しいカリキュラムと今後の課題』『白山情報図書館学誌』2、pp.1-8、などで同える。
- (5) 和田吉人（一九七五）『東洋大学司書司書補講習の概要』『東洋大学図書館学講座』東洋大学、pp.8-19
- (6) 東洋大学社会学部50周年記念委員会（二〇〇九）・<http://www.soc.toyo.ac.jp/university/>（2009—）
- (7) 文部省（一九六七）『司書講習等の改善に関することについて報告書』岡田温ほかによって提言された。
- (8) 根本彰（一九九七）『40年の空隙を埋める』『日本図書館協会教育部会会報』81、pp.11-13
- (9) 日本図書館情報学会研究委員会（一九九八）『図書館学研究とその支援体制』日本図書館情報学会
- (10) 図書館情報大学・筑波大学（二〇〇〇）大学間統合にむけて・<http://www.uis.ac.jp/kouho/>（2000-2007）

- (11) 司書の国家検定については、武田元次郎（一九九七）「日本の司書検定試験規定について」、『一夏会報』47、p2-3、で伺える。
(12) 同志社大学図書館学研究会については、高山正也（一九九九）「図書館学史の発展の中にみる慶応義塾と同志社」、『同志社図書館学年報』25、p8、の「小野先生と図書館学研究会」などで伺える。

(13) 和田吉人教授古稀記念祝賀会（一九八六）『和田吉人図書館学・その理論と実践』、早川図書

(14) 理論の石井とは、公共図書館論・図書館学研究をされた石井敦（東洋大学名誉教授二〇〇九年五月八日逝去）。

(15) 技術の岩淵とは、分類論・図書館学研究をされた岩淵泰郎（元東洋大学教授二〇〇四年十月十八日逝去）。

(16) 女子美術大学付属図書館（一九九五）松島文庫・松島先生講話・<http://www.ioshibi.ac.jp/library/> (2000-)

(17) 白山社会学会（二〇〇三）『東洋大学における社会学の未来を語る』、『白山社会学会』11、pp1-21参照。

(18) 東洋大学短期大学ハンドブック（一九九四・一九九七・二〇〇〇）司書課程カリキュラムを参照。

(19) 鶴見大学図書館学講座（一九九六）『事務連絡』、『一夏会報』46、pp176-179を参照。

(20) 東洋大学短期大学ハンドブック（一九九四）司書課程カリキュラムを参照。

(21) 高山正也（一九九九）『図書館学史の発展の中にみる慶応義塾と同志社』、『同志社図書館学年報』25、pp1-33にて、1980年代アメリカと同じ道をたどった日本国内の図書館学としての課題を伺える。

(22) 白山情報図書館学会は、一九八七年に設立。東洋大学の卒業生を中心に活動を行い、会員数一〇〇人前後。

(23) 鶴見大学図書館学講座（一九九八）『特別講演「図書館員とはいかなる人種か」、そして藤野幸雄先生のこと』、『一夏会報』48、pp90-95、を参照。

(24) 一九六〇年代、全国展開した教育活動（運動）にも関わらず、図書館などに資料がほとんど残存していない現状を、橋本典尚（二〇〇二）『「ネサヨ運動」とその周辺』、『社会言語学会予稿集』9、pp15-20、で伺える。

参考文献

- 石井敦先生古稀記念論集委員会（一九九五）『転換期における図書館の課題と歴史』、緑蔭書房
- 井上哲也（二〇〇五）『岩淵泰郎副会長のご冥福を祈る』『図書館情報学橋学会報』1、pp.8-9
- 岩猿敏生（一九九七）『図書館養成教育と図書館学教育』『同志社図書館情報学』23、pp.1-22
- 岩淵泰郎（一九九〇）『東洋大学図書館学専攻の新カリキュラムと今後の課題』『白山情報図書館学誌』2、pp.1-8
- 岩淵泰郎（一九九九）『和田吉人先生と図書館学専攻』『東洋大学社会学部40周年記念論集』pp.161-167
- 岩淵泰郎（二〇〇二）『応用社会学科図書館学専攻の歴史』『白山図書館学研究』緑蔭書房、pp.115-132
- 岩淵泰郎教授古稀記念論集刊行委員会（二〇〇二）『白山図書館学研究』、緑蔭書房
- 加藤修子（一九九〇）『図書館・情報学教育における主題専門教育』『図書館学会年報』37-3、pp.125-138
- 高山正也（一九九九）『図書館学史の発展の中にみる慶応義塾と同志社』『同志社図書館学年報』25、pp.4-33
- 東洋大学（一九八七）『社会学部応用社会学科』『東洋大学百年史・部局史編』、pp.324-334
- 東洋大学短期大学50年誌刊行委員会（二〇〇二）『東洋大学短期大学50年誌』、東洋大学短期大学
- 東洋大学図書館学専攻同窓会（二〇〇二）『会報でたどる同窓会の歩み』『白山図書館学研究』、pp.187-210
- 東洋大学図書館学講座（一九七五）『東洋大学図書館学講座史』、東洋大学社会学部図書館学専攻
- 日本図書館情報学会研究委員会（一九九八）『図書館学研究とその支援体制』、日本図書館情報学会
- 橋本典尚（一九九四）『40周年記念によせてー図書館という建物と音ー』『「夏会報」44、鶴見大学』、pp.47-49
- 橋本典尚（二〇〇〇）『会誌文における理解分析』『東洋大学大学院紀要』36、pp.353-364
- 橋本典尚（二〇〇二）『東洋大学短期大学と図書館学教育』『白山図書館学研究』、緑蔭書房、pp.179-185
- 橋本典尚（二〇〇三）『ネサヨ運動とその周辺』『東洋大学大学院紀要』39、pp.238-250
- 橋本典尚（二〇〇四）『ネサヨ運動とネハイ運動』『東洋大学大学院紀要』40、pp.237-250

橋本典尚 (二〇〇五) 「いことば」の教育活動と臨床視点、『東洋大学大学院紀要』41、pp297-312

橋本典尚 (二〇〇七) 「ことばからのコミュニケーション活動と教育視点」、『東洋大学大学院紀要』43、pp246-262

橋本典尚 (二〇〇八) 「児童の教育活動からみる「ネサヨ運動」と「ネハイ運動」の実態」、『国立青少年教育振興機構研究紀要』8、pp177-185・<http://www.njve.go.jp/restreport/pdf/kyo0815> (2008-)

堀込静香 (一九九五) 「司書講習と特別講習・図書館学の鶴見といわれるようになって」、『図書館雑誌』89-6、pp434-435

キーワード・教育視点・カリキュラム編成・資料調査

資料二〇一〇年二月現在

(はしもと・のりなお)